
【原典回帰(グラン・ルツール)】 ジークフリートはかく語りき

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラン・ルツール
【原典回帰】 ジークフリートはかく語りき

【Nコード】

N6518Y

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

「いつくんもISに乗ってみたいなかな？」

全ての【おとぎ話】は、ウサギのこの一言から始まった…

皆様、はじめましてm(┌┐)m

…ではないかもしれませんが、変人物書きの暮灘雪夜です(^^)；

暮灘、またやらかしてしまいました！！(爆)

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、暮灘は

【俺のたばねえがこんなに可愛いに…決まってるだろ？】

通称【俺束】というIS二次SSを書いてますが、その中で【原型になった全く別の話がある】とご感想の返信をはじめ、何度か書いた事があるのですが…

実は、この作品がそうです(；^| ^A

正確にはタイトル未定で大雑把なプロットとスケッチしかなくて、それを作品に仕上げたのが、この【グラン・ルツール原典回帰】です。

タイトルは、【暮灘が初めてプランニングしたIS二次創作だから】
という意味で(^ | ^ ;)

内容は一夏が主人公で、極力原作キャラで書いて行きたいなと(^ | ^ ;)

メイン・ヒロインズは【欧州三人娘】かなあ？

それと、束は白兔(笑)です

また、【ガンダム00】の影響をとて強く受けた作品です

先ずは試験連載から始めようと思ってますが、こゝ鼻肩戴ければ幸いです(〇>・・)(b

皆様、こんにちはー

最近、執筆が迷走気味の暮灘です（^^；

ゲリラ的に初めてしまいました【原典回帰】（^| ^；）

最初のエピソードは、いっくんより束&千冬の【お姉ちゃんズ（笑）】が目立ちます。

というか白兔な束が書いてて新鮮でした（；^|^A

そして、彼女の口から飛び出す驚きのプランとは？

物語は最初から波乱含みの展開です

では皆様、暮灘が一番最初に考えたIS物語…

楽しんで戴ければ幸いです（o^_^）b

それは小学校6年の時、東お姉ちゃんのたった一言から始まった…

「ねえ、いつくん…いつくんもISに乗って見ない？」

それは、俺にとっては夢のような…

あるいは、【おとぎ話のような日々】の始まりだったんだ…

時間軸を少し戻そう…

某所、【篠ノ之束の隠蔽研究所】

「一夏をISに関わらせる…だと？」

半ば殺気に近い気配を発しながら、全てのISの生みの親である”篠ノ之束”の背中を睨みつけるのは、”織斑千冬”だった。

そう、ついこの間終わったばかりの【世界最強のISパイロットを決める大会】…【モンド・グロツソ】において圧倒的な実力で優勝し、《ブリュンヒルデ（最強の女性）》の座に君臨した、シャープな印象の妙齡な美女だ。

「ちーちゃんは優勝したよね？ まともな諜報機関と解析能力がある国家なら、もう既に【白騎士の中の人】が誰だったのか…もう気付いてると思うんだよ」

「…動きのクセか？」

「そうだね。ちーちゃんの動きはベーシックが【篠ノ之御剣流】…」

束は画面を見つめながらキーボードを叩いていた指を止め、椅子ごとくるりと振り向き、

「正確には【飛天御剣流篠ノ之派】…太刀筋が、IS風に言っなら斬撃モーションに特徴が有りすぎるんだよ」

半ば確信めいて束はこう続けた。

「それこそ、【白騎士】から【暮桜】に乗り換えたくらいじゃ隠しきれないぐらいにね」

「ちーちゃんが、いつくんをISから遠ざける事を守るうとしてるのは分かるよ…」

でも、束は泣いてるような笑みで、

「でもね…残念だけど【モンド・グロツソ】って”分水嶺”は、もう過ぎちゃったんだよ」

「だから？」

それは束の意味が理解できないからじゃない。

千冬が束の”真意”を聞きたいが為に発した言葉だ…

「本来はISは宇宙開発用…あらゆる環境に適応できるようにマルチフォーム形態が取れるフレーム・スーツとして開発したんだけどね…」

束はふと過去を振り返りながら…

「ちーちゃんも知ってる通り、”白騎士事件”でハッキングしたミサイルを相手にデモンストレーションしたのは、単に性能実証した

だけのつもりだったんだけどさ…」

束は自嘲しながら、

「薬が効きすぎたみたいだね？ 肝心の宇宙開発は停滞したままで

…」

彼女は一瞬、天井を…いや、その先にある天を見つめ、

「今のISは間違いなくやろうと思えば戦略級の破壊力が出せる【
戦術兵器】だよ…誰がなんと言おうとね」

「そっだ」

千冬が事実のみを肯定するように頷く。

「ちーちゃんは、【ガンダム】って好き？」

「一部のシリーズを除き、全て試聴してるが？ お前だって知ってるだろっ？」

「あはは 確認しただけだよ」

束はそう言つと、

「…」 Gガンダム” って覚えてる？」

「ああ」

「アレに【ガンダム・ファイト】って出てきたでしょ？ 【モンド・グロツソ】は基本的に同質な物なんだよ」

束は千冬を真つ直ぐ見ると、

「I Sを兵器転換した場合の怖さは、残留放射能や毒物汚染、生物汚染を出さないコンパクトで運用が簡単な”戦術兵器”なのに、使い方によってはNBC兵器と同等の【戦術級の破壊力】を出せる点なんだよ…言うならば、【大量破壊戦術兵器】って新しいジャンル
の兵器…」

「そんな物が戦場に姿を現せば、どうなるかは分かるよね？ 運用側は汚染なんか戦後に必ず問題になる戦術兵器を封印したまま、ノリスクに戦術兵器と同等の破壊を行使できる…従来より遥かに簡単に、そして気楽に街一つや国一つを焼け野原に変えられるようになる」

千冬は漸く口を開き、

「それを抑制する為の【アラスカ条約】による軍事転用の禁止だ」

「だけど、人は強力な力を持つと使いたくなるものだよね？ だから、軍事転用を禁止する代わりに【戦争の代償行為】を求めた…」

千冬は「フフツ」と皮肉げに笑うと、

「IS保有国同士なら”MAD（相互確証破壊）”による互いの国の殲滅戦、【IS同士のゴツイ戦争】を回避する為の方便：それが【モンド・グロツソの本質】、だろ？」

「ちーちゃん、大正解だよ」

「今のISの本質が、【疑似戦争で使われる兵器】である以上、巨大な利権が絡んでくるのは分かるよね？」

千冬は苦々しい表情で、

「世界各国に規模の大小に関わらず存在する国防産業：時の政府すら動かす【軍事産業複合体】か…」

「例えばヤンキー軍事産業複合体は、20000以上もの軍需関連企業、大学、研究機関、軍の研究開発部門、様々な退役軍人の外郭団体に犯罪組織がタッグを組んでるよ。その権力は、軍や各諜報機

関、有力政治家の資金源になってるせいで国家最大級…」

束は一度言葉を切り、

「邪魔になった時の大統領や国家要人すらも簡単に暗殺して、世論を誘導して国家戦略まで何度もネジ曲げ、戦争を起こしてきた…」

「ヤンキーが15〜20年周期で戦争を欲するのは、軍事産業複合体を食わせる為らしいからな」

と、千冬がさして面白くもない冗談でも言うつような口調で言えば、

「1980年代以降のアメリカ大統領は、【悪に向けて撃ったミサイルの数で支持率が決まる】とも言われるよね？」

「そして、各国軍事産業の一部が先鋭化して国境を越えて手を結んで、【シンジケート】を結成する場合もあるしね」

束の台詞にハツとした顔で、

「ファントム・タスク【亡国機業】か…？」

束は無言で頷き、

「色々と許したくない不満はあるけど…ほーきちゃんは、要人保護プログラムでそれなりに信頼できる人員が配置されて守られてるし、私自身も【アクティブ・シーカー（ステルス自動偵察ポッド）】で

24時間体制で警戒してるからいいけど…」

束は真剣な瞳で千冬を見て、

「いつくんは、既に【何も知らないからこそ守れる】レベルを越えてるんだよ…」

「……………」

「ちーちゃん、自覚して欲しいん。ちーちゃんは【ブリュンヒルデ…】最強の人類”なんて俗っぽい意味じゃなくて、国家や組織にとつては【世界最強の戦術兵器】なんだよ？」

「束…お前は、一夏に何を求め、何をさせたい…？」

千冬が真剣に問い掛けると、

「次のモンド・グロッソまでにいつくんはちーちゃんが鍛え上げ、私が【最強の”純戦闘用IS”】を完成させる…そして、」

束は迷いの無い瞳で、

「いつくんに【第二回モンド・グロッソ優勝者】になってもらおうんだよ…!!」

「なんだとっ!?!」

束の回答に、クールな千冬には極めて珍しい、仰天と言っている表情をした!

「いや、しかし…一夏は男だぞ?」

またしても珍しい事に動揺する千冬に、束は優しく微笑み、

「できるよ。ちーちゃんが鍛えた【白騎士のコア】を使えば、簡単なんだよ」

「…どういう意味だ?」

「ISのコアは、本当は性別以外にも血筋…DNAパターンや他の要素にも強く反応するの。ううん…」

束は首を横に振り、

「むしろ、性別つて要素より他の要素が強く働いて、性別をまるで無視するケースがままにあるんだよ」

そして、束は複雑な笑みを浮かべ、

「経験値を積んだコアほどその傾向が強いんだよ…まるで、女性操作縦がデフォ設定で、コアが経験するほどコア自身が【ISパイロットに必要な要素】を選別して優先順序を変えてるみたいに、ね」

「何とも珍妙な話だな…」

「製作者の私が言うのもなんだけど…私もそう思うよ」

しかし束はカラッと笑い、

「細かい理屈はさておき、いっくんがモンド・グロツソに優勝する事は二つメリットがあるの」

束はピース・サインのように人差し指と中指を立てて、

「一つは、”女尊男卑”の風潮の根幹、【ISは女しか女性しか操縦できない】っていう既成概念…むしろ、大前提を破壊して、いっくんを狙ってくるだろう組織を混乱させ、足並みを乱れさせられんだよ」

束は中指を下ろし、

「もう一つのメリットは、いっくんをちーちゃん並の【高戦闘力要

注意人物】にすることで、迂濶に手を出す事に二の脚を踏ませられる。それに…」

「それに、只でさえ【世界初の男性ISパイロット】という事で世間の注目を集められるのに、【モンド・グロツソ優勝者】ともなれば世間の目は一挙手一投足まで集中する…だろ？」

束は大きく頷き、

「その通りだよ 卓越した戦闘力に世間の注目…いつくんは、【ちーちゃんの急所】から、どんな相手でも簡単に手を出すには【リスクが有りすぎる存在】になるんだよ」

合理的であった。

どういふ手段で大会に出場させるか？とか色々と問題はあるが、それでも【一夏を守る】という意味においては、多くのメリットがあった。

だが…

「束、一夏が仮に優勝したとしよう。私が【ブリュンヒルデ】なら、一夏はさしずめ【ジークフリート】といったところか？」

「あはは ちーちゃん、意外とネーミング・センスあるね」

手放しの誉め言葉に千冬は少し恥ずかしそうに”コホン”と咳払い

して、

「一夏が【ジークフリート】になった後、お前はとうするつもりだ？」

束は「うん…」と少し考え、

「まだ深くは考えてないけど…」私の仕事”を手伝ってくれたら、嬉しいかも」

「お前の仕事？」

束は苦笑いしながら、

「仕事って言うより使命かな？ 私は何とかしたいんだよ…このどうしようもなくくだらない【閉塞してしまった世界】の殻を破って…」

束は再び天井を、その彼方にある天空を見つめ、

「人って種が、再び宇宙^{そら}の果てを目指す日を見てみたいんだ…」

今、篠ノ之束が用意した銃に、【織斑一夏】という弾丸が装填される。

カチヤリと撃鉄が引き起こされ、引き金が引かれた時…

果たして弾丸は、世界に風穴ひょうてきを空ける事ができるのか？

答えはまだ、混沌の中にしか存在していない…

皆様、ご愛読ありがとうございましたm()m

暮灘作品には珍しく、最初からシリアスなノリで始まってしまった物語ですが、如何だったでしょう？(^^)；

どうやら束の陰謀(笑)で、一夏は【第二回モンド・グロツソ】に出される様子：果たして、どうなる事やら)；^|^A

そして、ヒロイン達との邂逅はいつになるのか？(笑)

試験連載なので色々と不確定要素の大きな作品ですが、これ以降もご贖肩戴ければ幸いですm()m

それでは、また次回もお会いできる事を期待しつつ(o^_^)(b

皆様、こんばんはー

ギリギリですが、何とか日付が変わる前に第2話を書き終えたので、即座にアップすることを決めた喜灘です（^^；

いや、明日の朝にアップした方が明らかに読者様が読んで下さるのはわかっているのですが、これも性分故にご容赦を（^| ^；）

あと、ご感想はこのエピソードをアップ後にじっくり読み返信させていただきます（――）

さて、今回のエピソードは…

作中に出てきますが、二年後の【第二回モンド・グロッソ】の開幕まで話が飛びます。

一夏は、この二年間を振り返り…なんか東が妙に可愛く、千冬が漢前です（笑）

そして、ラストにはチラッとあのヒロインが…

こんな感じのエピソードですが、お楽しみ戴ければ幸いです(〇^
,) b

【第二回モンド・グロツン】会場

一夏 side .

「な…」

（長い道のりだった…）

いや、僅か2年間がこんなに長く感じるとは…

（よく俺、生き残れたな…）

この2年間、朝から晩まで鬼神と化した千冬姉のシゴキと束さんの講義…

しかもいたのが通称【ウサギ小屋】：世界を相手に追いかけてこしてる束さんの極秘アジトだったもんだから、回りに気分転換になる施設なんかありゃしない。

(いや、でも最後の方は千冬姉のシゴキはさほど苦しくは感じなくなってたけどさ…)

むしろ、参ったのは東さんの講義だ。

ぶっちゃけてしまうと、俺は頭が悪い！

前の講義を覚えてなかったり、あまつさえ講義中に居眠りしようなら…

『ごめんね、いっくん…私の教え方が悪いんだよね…』

って涙目になるし、その度に…

『東を何度泣かせれば気が済む？ このバカ者が！』

なんて千冬姉の竹刀が容赦なく飛んでくる始末だったんだぜ！

(…たく…千冬姉も、俺の頭がこれ以上パーになったらどうすんだよ…)

まあ、それに抗議した事もあつたけどさ…

『僅か2年でお前を最強パイロットに仕立てるんだぞ？ ならば無理を通して道理を蹴り飛ばすしかあるまい』

…いつから千冬姉は、ギガ・ドリル・ブレイクの使い手になったん

だよっ！？

いや、同じくらい威力の有りそうな…

(ギガ・コークスクリュー・アッパーなら何発か食らったけど…)

それにしても…

(素手でISのシールド打ち抜いて本体に直接ダメージ与えるとか…)

本当に千冬姉は人類にカテゴライズされてるのかな？

(実は宇宙の果てからやってきた戦闘種族って言っても、俺は絶対に信じるぞっ！！)

ほら、ハイパー化すると髪が金髪になる種族とかさ。

まあ、パッキンにした千冬姉も見てみたい気はするけど…

(きつと迫力あるだろうな)

最終的には、束さん特性【睡眠学習装置】なんて古典的かつ妖しげな装置まで導入して何とか辻褄を合わせたけどさ。

えっ？

そろそろ、お前の名前を明かせて？

おっ、すまん！

まだ喋って無かったっけ？

俺は【一夏】いちか。

【織斑一夏】おりむらいちか。

今年14歳で、本来なら日本で気楽に中坊やってる予定だったけど…

（何の因果かISパイロットなんぞやってます！！）

そう…俺こと織斑一夏は、今のところ【世界で唯一の”男性”ISパイロット】って事らしい。

実際には、2年前…小6の時に東さんに誘われてた頃から乗ってるけど、世間様に初公開となったのは、ついこの間の【第二回モンド・グロツン】の出場選手発表の時だ。

『私達の大事な宝物で希望、いつくんのお披露目だもん 華やか

にやらないとね〜』

はいはい。

東さんには千冬姉と違う意味で逆らえませんか。

という訳で、俺はちゃんと許可を取ったの演出、

【大会主催者（国際IS委員会）特別推薦枠選手】

発表の時にISで直接、会場に乗り付けて記者団の前に降り立った。

まあ、その時に「俺が本当に男なのか？」とかピーチクパーチク五月蠅かったので、

『百聞は一見にしかず』だっ！ 黙って俺の身体を見やがれっ！』

と、ISを除装して更にデュノア社に特注したISスーツまでその場で脱いでオールヌードで会見に臨んだ。

俺は身長こそ172cmと高くは無いけど、完璧な栄養バランスの食事に千冬姉のシゴキ、体内に入れてる【多目的ナノマシン】の影響で、自分で言うのも何だけどかなり鍛え絞られた体つきをしてる。

腹筋はしっかりと六つに割れてるし、体形はブルース・リーに近いかも知れない。

ナルシスト的な発言に聞こえるかもしれないが、見られて恥ずかしい身体はしてない。

まあ、後は暗記してた会見原稿を喋って帰ってきたけど…

『頼まれもしないのに、裸をタダ見せする奴があるか！ バカ者！』

と、千冬姉に叩かれ…

「いつくんの…えつち」

と、束さんに真っ赤な顔で上目使いされてしまいました(デヘヘ

ご褒美ご褒美)

まあ、そんなこんなで二回目の【モンド・グロツソ】に出場する訳になった俺でした。

(それにしても、あっさり大会主催者特別推薦選手になれたのは驚いたなあ…)

本来は国家代表しか出れない大会に、俺は千冬姉と束さん連名の推薦状一枚で、あっけなく出場する事ができた。

それだけ、全てのISの産みの親である束さんの権威と、第一回大会の無傷の優勝者である千冬姉の権威が高いのか…とも思ったけど、話はそう単純ではないみたいで…

『要するに、どいつもこいつも【初の男のIS乗り】に興味津津なのさ』

とは、千冬姉の弁。

『まあ、精々観察日記をつけられる側、さしずめ【珍獣気分】を味わってくるといい。普通の人間が普通に生活してれば、まず味わえん気分だ』

(なんて嫌な名前の気分なんだ)

確かにレアかもしれないけど、出来れば一生味わいたくはない気分だった。

んで、現在は…

「何故か、ドイツ・チームのピット（ISの補給や整備を行う場所）

に間借りさせて貰っていたりして」

ISは完成したし、ジグなんかの整備機材や調整機器は一通り用意できたけど、いくら束さんでも【信頼できるピット・クルー】…つまり、補給や整備を行うバックアップ要員までは手配できなかったらしい。

『当たり前だ。前の大会の直後、既にこちらの眼鏡に叶うようなピット・クルーは国家や有力勢力に押さえられてるに決まってるだろう？』

と、千冬姉。

『お金はあるんだよ、お金は…だけど残ってる人員の大半は、技量が足りないか、信頼が足りないかあるいは両方なんだよ…』

こっちは束さん。

要するに、腕が無いか油断すれば束さんの研究成果を好き勝手に持ち出しかねない連中しかいないって事だな。

勿論、世界中が欲しがってる…平たく言えば、身柄を拘束したがつてる世界最高の頭脳の持ち主【篠ノ之束】本人のお出ましは論外…

俺も簡易整備や調整、単純な補給ならできるけど、

(流石にパイロットやりながらは無理があるしな…)

そんな事情で、俺はドイツ・チームのピット・スペースとクルーを借りる事になった。

(勿論、タダって訳じゃないけどな…)

束さんが【各国に】提示した条件は二つ。

一つは整備や補給レベルで取れる専用騎や俺のデータは、好きに取っていいという事。

もう一つの条件は…

(まあ、これは俺が実力を示せば…だから、)

後で考えればいいや。

ちなみに、この二つの条件は余程魅力的だったのか、【束さんが要求する水準のIS運用能力がある】とされた全ての国がピットとクルーの提供に名乗りをあげ、戦争もかくやという一触即発な空気になりかけたが…

結局、束さんの代打で専用IS【暮桜】に乗り出てきた前大会の優勝者、要するに千冬姉の抽選でドイツ・チームに決まった経緯がある。

俺は、束が俺の為だけに作ってくれた専用IS…【雪崩】なだれのボディを撫でながら、

「いよいよ出番だぞ…【相棒】」

俺が、俺だけの…俺と同じく世界で今のところ唯一の【純戦闘用】ISのシャープなラインのボディを撫でると…

「アバランチェ雪崩」と話していたのか？」

「ああ」

俺は耳に馴染んできた声に、俺は振り返る。

その視線の先にいたのは、雪みたいに白い肌に透き通るような長い銀髪…

何となく”妖精”を連想させる【オッドアイ（左右の瞳の色が違う事）】の小柄というか、幼い感じの少女が、手に朝食を乗せたトレイを持ち立っていた。

「グーテン・モーゲン。”フロイライン・ボーデヴィツヒ”」

するとその女の子は不思議そうな顔で、

「私の事はラウラでいいと言ってるだろう？」

俺は苦笑しながら、

「まあ、1日の始まりぐらいは”フロイライン（お嬢さん）”と付けてみたくてね」

「つくづく変わった男だな」

そりゃどーも。

こうして、今日も俺の一日が始まるのだった。

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

何となく書いてて、

「千冬と束って夫婦っぽいなあ…」

とか思ってしまった暮灘です(^^)；

なんか嫁を泣かす不出来な弟をたしなめる夫というか(笑)

さて、今回はいっくんの一人語りでしたが、如何だったでしょうか
?(^| ^;))

どうやら、1stヒロインの座はラウラが射止めた模様です(笑)

ただ、このいっくんは原作よりハードなキャラなので、果たして恋愛はどうなのか…(汗)

今回は、一夏とラウラのなれ初めを、少し時間を遡り書ければと思っています。

深夜アップなので、どれ程の読者様が読んで下さるか不安ですが、どうかよろしくお願いします(――)(

それでは、また次回にお会いできる事を期待して(o^_^)(b

皆様、こんにちはー

今日も元気に左目が痛い暮灘です（^^）；

暮灘は、この時期になるとアレルギーが出て色々大変です（；；）

ー ^ A

速射投稿で、早速3話 目

今回のエピソードは…

前半は、とにかくラウラと一夏がほのぼのしています。

そして、ラストの方はイチヤイチヤしてます（笑）

ラウラさんの【ヒロイン臭（笑）】が炸裂し、ぶっちやけ書いてる暮灘が砂糖を吐くかと思いました（^ー^；）

ラウラの愛らしさと悲しみや寂しさ、一夏の【原作とは著しく質の違う優しさ】が描けていたら勝ちかな？…と（^^）；

後半は、わりとシリアスに一夏とラウラの出会いが描かれます。

そして、多分次話の冒頭以外はもう出番が無いかもしれませんが、原作にはあまり出てこないタイプのオリキャラが出ます。

そして、捏造設定（条約）が出てきたりして（；^ー^A

とりあえずこんな感じのエピソードですが、お楽しみ頂ければ幸いです（o^_^）b

俺の目の前に立つのは、雪みたいに白い肌に透き通るような長い銀髪…

何となく”妖精”を連想させる雰囲気、【赤と金のオッドアイ】が印象的な少女…

加えて小柄というか幼い感じの少女が、手に朝食を乗せたトレイを持ち立っていた。

「グーテン・モーゲン。”フロイライン・ボーデヴィツヒ”」

するとその女の子は不思議そうな顔で、

「私の事はラウラでいいと言ってるだろう?」

俺は苦笑しながら、

「まあ、1日の始まりぐらいは”フロイライン（お嬢さん）」と付けてみたくてね」

「つくづく変わった男だな」

「朝飯を持ってきたのだが…もしかして【対話】の邪魔だったか？」

「いや、朝の挨拶をしてただけだからな。もう済んだ」

「そうか」

ラウラは二人分の朝食をピット・ガレージ…というか、俺のIS【
雪崩なだれ】の横にある小さなテーブルに置き、

「食料が無駄にならなくて何よりだ」

と、無表情の表情とでも言うのかな？

何となく、わずかに微笑んだような気配をだすラウラに、

「貴重なリラックス・タイムを無為にしてたまるか。第一、飯を無駄にしたら【勿体無いお化け】が出るぞ」

「もつたいないおばけ」？ それはなんだ？」

食いついてきたラウラに俺は、

「日本の比較的新しい民話に登場するお化けだ。食料を粗末にする
と、夢枕に立つらしいぞ?」

と、決して嘘ではないが適当な事を返しておく。
するとラウラは感心したように、

「日本には、そんな珍奇なモンスターがいるのか?」

「さあ? 少なくとも俺は見たことはない。なんせ…」

ドイツ風カツレツをパクつきながら、

「好き嫌いが全く無い。一度も飯を残した事がないのが、数少ない
自慢だ」

ラウラは左右で色の違う瞳で俺を真面目に見て、

「健全な精神は、健全な肉体を作るというらしいからな。好嫌や無
駄なく計画通り栄養接種できてるのなら、そこは見習うべきだな」

ほほう。

それはつまり、

「ラウラは好き嫌いがあるのか?」

「…ピーマンが嫌いだ」

…言っておくが、これでも会話はかなり盛り上がってるんだぜ？

なんせ最初…ラウラと初めて出会った「サー・イエッサー」「」で
あります」って世界だったもんなあ…

そう…

この雪みたいに白い肌に銀色の長い髪、赤と金の左右で違う瞳の色
の…

なんていうか、北欧州のおとぎ話に出てくる”雪の妖精”が現実に
抜け出てきたみたいだな、薄くて平たくてちみっこい美少女は、

【ラウラ・ボーデヴィット】

ドイツご自慢の最強IS部隊^{フラトン}、【シュヴァルツェア・ハーゼ（黒ウ
サギ隊）】の一員…

（かつてはエースも今は昔…か）

「なあ、ラウラ…」

そろそろ二人揃って朝飯を終えようとしてる頃、俺はラウラに声をかける。

「なんだ？」

「俺としては、可愛いお前と二人きりの食事ってのは、激しく心踊るが…」

「…そうか」

ラウラは困ったような…というか、俺の言葉の意味が分からず、リアクションに困るといふ顔をしていた。

「たまには部隊の皆と食わないでいいのか？」

「…私はお前の【慰安婦兼任従兵】を命じられてる」

なんか、酷く魅力的な響きだなあ、ヲイ。

「そりゃそうかもしれないけどさ…」

「…それに、【出来損ない】の私に、あの部隊の末席に情けで…他の部隊が、今やただの”不用品扱い”の私を引き取りたがらないだ

けで置かれてる私に…」

その時のラウラは、いつもと同じ無表情だったけど、何だか泣いてるように見えた…

「居場所なんて…無い」

「そっか…」

俺は、食事の終わったラウラをこいこいと手招きして、

「よっ」と

”ぼすん”

と、素直にとてとてきたラウラの小柄な肢体を抱き上げ、膝に乗せた。
そして…

”ぎゅっ…”

包み込むように後ろから強めに抱き締めた。

「ラウラ…悪い。辛い事を言わせてしまったな…」

「いや、気にするな。イチカは何一つ悪い事を言っていない」

「そっか…」

「ただ、ラウラは抱き締める俺の腕に自分の手をそえて、」

「何故だろうな？ イチカの腕の中になると、とても安心できる気がする。イチカの鼓動を背中に受けてると、苛立つ気持が薄れていく気がする…」

俺は、腕の力を少しだけ強めた…

この薄幸な小さな少女が春が来た後のなごり雪みたいに消えてしまふように感じたから…

「イチカ、少し苦しいぞ？」

「ただ、俺はオーダーを却下する代わりに、ラウラの耳元でこう囁いた…」

「俺がお前のそばに居れる間は、ずっと俺のそばにいる…」

「イチカ…？」

「俺がラウラの居場所だ…異論は認めない」

「ラウラを俺を色の違う左右の瞳で真っ直ぐに見つめ、」

「…絶対遵守命令として受け取るぞ？」

「それでいい」

俺が頷くと、

「わかった。ラウラ・ボーデヴィッツの名にかけて拝命する」

少し半月前…ラウラと出会った頃の話をしていいかな？

そう、あれはドイツのピット・クルーとの顔合わせのパーティーの事だ。

その席上で、俺はドイツの代表選手団…正確には、ドイツ代表IS選手【クラリツサ・ハルフォーフ】大尉率いる【シユヴァルツェア・ハーゼ（黒ウサギ隊）】の面々と顔合わせをした。

その時、俺はパーティー会場の隅っこに所在無さげに立っていた、見事な銀髪の小さな眼帯少女を目に止めた。

「アルゲマイネ情報小佐、彼女は？」

このパーティーで俺の”接待役”という名の監視役を買って出たらしい、軍情報部の高級将校に訊ねると、

「ああ、【出来損ない】です」

俺と同じくらいの身長で、典型的な金髪碧眼の”アーリア系美人”ではあるが、どこか酷薄な印象のする瞳でアルゲマイネ小佐は切り捨てた。

「【出来損ない】？」

その不穏な呼び名…ぶっちゃけ”蔑称”を聞き直すと、

「失礼。彼女は戦闘用のDNAチューンが施された”試験管ベイビー（人工受精者）”なのです」

ライライ…

「もしかして、あの娘は【キャンプ・ホルンクス・プロジェクト（戦闘人造人間計画）】の生き残り…ですか？」

「!?!? よくご存知ですね…?」

「そりゃまあ、一部では有名な計画だったし…」

13年前：俺が1歳の時に施行された

【ベルファウスト生命倫理国際条約】

により、軍事利用目的の人工受精卵（試験管ベイビー）やクローン
の開発や研究は、基礎レベルから全面禁止されている。

元々、十字教が倫理感の根本となってる国家群の後押し（正確には
『神の領域の研究を、人間同士の争いに使うとは何事ぞ!!』とい
う反発）を背景に賛成多数で国連で可決された、通称【ベルファウ
スト条約】だが、可決から施行まで7年間の猶予が持たされた。

（その間に駆け込み需要ならぬ、【駆け込み研究】が世界中で乱立
したんだよな…）

有名所ならアメリカの【アルティメット・ソルジャー計画】、中国
の【超兵無双計画】、フランスの【ナポレオン・トライアンフ計画】

…

そして、その中で最も完成度が高かったのが…

(ドイツの【カンフ・ホルンクス計画】…)

元々、ドイツは血統や民族に対する拘りが強いお国柄だ。

哲学者のニーチェは【哲人思想】を産み、ヒトラーは【優良種たる我らアーリア人が、なぜ劣等種や劣悪種に屈辱を受けねばならぬ】と主張し、僅か数年で巨大軍事帝国を作り上げ、世界を巻き込む大戦争を繰り広げた…

この事実だけでも、ドイツ人の気質は分かるだろ？

現代日本人じゃ考えられない程の民族に高いプライドを持つのがドイツ人だ。

そして、それは反ヒトラー主義がメインの戦後世界になると、DNAという言葉が生命工学でもはやされる時代になっても、その気質は変わらなかった…

そう、【他民族より優れた存在でいたい。重んじられたい】という願望が、だ。

（それが、【キャンプ・ホルムクス計画】が他国の同種計画よりも一歩以上先を行く成果が出せた理由だ…）

まあ、他の人工受精卵計画は【先天的にスーパーな性能】を求め過ぎて、満足な結果が出せなかったとも言われている。

（所詮は遺伝子操作って言っても、塩基配列を組み換えるだけだしなあ…）

実際、CGATで表される”素材”は同じなんだから、そうそう簡単に【スーパー人類】は生まれないうてこつたろう。

実際、遺伝子操作や人工受精は、民衆からの反発と技術的な頭打ちで、少なくとも軍事方面では下火になっていた分野だ。

ドイツは、【先天的スーパー人類】を作るより、ニーチエ的に言うなら【人間の枠組みを超えたあらゆる訓練に耐えられる頑強な”万能の凡人”】を作り、《後天的疑似天才》を作ればよしと考えた。

（それが、結果に決定的な差を生んだ…か）

「お察しの通り、アレは【キャンプ・ホルムクス】の生き残りです」

「ドイツ自慢の”戦闘妖精”ですか…」

するとアルゲマイネ小佐はうつすらと笑い、

「ISが出てくるまでは、確かにアレもそう呼ばれるべき存在だったでしょうに」

「? どういう意味です?」

アルゲマイネ小佐は俺を値踏みするように見ると、

「ヘル・オリムラ…貴方は、【越界の瞳】ヴォーダン・オージュをご存知ですか?」

「IS適正を引き上げる為、【視覚能力強化と脳への伝達/処理能力強化を目的としたナノマシン処理】という意味であれば」

「結構」

アルゲマイネ小佐は手間が省けたとばかりに小さく頷き、

「理論上は失敗がない筈のヴォーダン・オージュ処理…アレは唯一の【適合不的確者】なのですよ」

なるほど、そういう事か…

「アルゲマイネ小佐、あの娘の名前は?」

「ラウラ・ボーデヴィツヒですが…それが?」

俺はそのちみっこい美少女に歩き出しながら、

「なに…彼女と話してみたくなっただけですよ」

これが、俺とラウラの出会いだったんだよな…

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

まさに第3話は【一夏とラウラの為のエピソード】でしたね〜(^^
^:;

暮灘が思うに、東と千冬に鍛えられてる内に、どうやら【原典回帰】
のいっくんは、原作より少し大人になってみたいですよ。

人の痛みをちゃんと感じられ、それを優しく包める【漢】に育って
くれて、良かったなあ〜と(笑)

ラウラも、原作より大分違ってきてる様子…

あつ、それと捏造設定【ベルファウスト条約】はどうだったでしょ
う? (^^―^^:)

今回は、今回の続き的な展開かな?

とりあえず、モンド・グロツソはしばらく続きます(^^:;

それでは、また次回お会いしましょう(๑>^_^)(b

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6518y/>

【原典回帰(グラン・ルツール)】ジークフリートはかく語りき

2011年11月20日19時34分発行